

会誌『農業』（令和3年5月号）

巻頭言 原発事故から10年、飯舘村の再生

公益社団法人大日本農会 理事 三輪 睿太郎

今日は東日本大震災発生から10年後ということでテレビでは特集が盛んに放映されている。当時のことを思い起こしながら、「田尾陽一：飯舘村からの挑戦－自然との共生を目指して（ちくま新書）」を読んだ。

著者の田尾氏は高エネルギー研の加速器の設計に携わった物理学者である。事故後の6月、福島でできることを探すべく、旧友16名とともに飯舘村の先進農家、菅野宗夫氏（以下、宗夫氏）を訪れた。全村避難の予定を知り落胆したが、宗夫氏から、このメンバーの来村に合わせて避難先から村に戻り活動に付き合うとの申し出があり、「ふくしま再生の会（以下、再生の会）」が生まれたという。再生の会は「福島の現地で自然と共生する人間の本来の姿を取り戻す」という趣旨に共感する学者・文化人に加えて全国のボランティアの参加を得て、宗夫氏ほかの村民と現地で「協働」をくりひろげた。放射能の計測、生き物調査、除染、農地の復元と精算、文化財の保全などに会員の知性と熱意が投入された。農学の貢献は大きく、東大農学部による積極的な連携や、鮫島宗明氏（元農業生物資源研究所）、溝口勝氏（東大農学生命科学研究科教授）ら農学者の働きは上記の田尾氏の著書でも大きく取り上げられている。

田尾氏は活動の中で、「国は地元からの要請がないと動けない、地元は国が指示するなら動く」という自体に何度も遭遇し、それを「誰も責任をとりたくないという社会のメルトダウン状態」と指摘している。同様なことを我々は昨年来の新型ウイルス騒動で見聞きすることになった。社会の中で、根とか背骨、神経、柱、心に例えられるものがメルトダウンしかけているのではないかと心配になる。

テレビで報道されているように、事故炉の解体過程で事故の真相が次々と明らかになりそうだ。私は太陽に依存しないエネルギーとして核エネルギーに注目し、その利用を肯定し、期待する者である。事故炉の設計・製造から、事故に至る過程におけるすべての責任を明らかにし、原子力利用が自然と共生する人間の技術として再生することを願っている。

飯舘村は村民（2017年の避難解除を待って移住した田尾氏を含む）が自立し、自然と共生する村として歩み始めた。田尾氏は宗夫氏と会った瞬間にそのひととなりがかかったという。宗夫氏も田尾氏に対して同じ印象を持ったのであろう。いわば徳と徳の出会いが村の再生の原動力となった。

全国各地の中山間地域では集落営農によるオペレーターへの機能集中などの工夫も高齢化で持続が危ぶまれている。帰還者は高齢者ばかりというところから歩みをはじめた飯舘村の再生はこの問題に根源から向き合うために重要なものをあたえているのではないだろうか。